

フランスの 匿名出産

現場からの報告

2023.12.17



慈恵病院の蓮田健院長（右奥）に匿名出産した時の状況を話すマリーさん（仮名）
10月中旬、パリ市（代表撮影）

「どんな考えも尊重してくれた」

「妊娠に気が付くのが遅かったんです。当時38歳でした。10月中旬、パリ市にある養子縁組の民間団体「FAF」の事務所。マリーさん（仮名）は落ち着いた様子で語り始めた。数年前、匿名出産で赤ちゃんを産み、養子縁組に託した。自身の手で子どもを育てることはできなかった。「関わってくれた専門職全員が、どんな考えも尊重してくれた。気持ちを聞いてくれる安心感があった」。フランスの母子支援を学ぶため渡欧し、話を聞いた慈恵病院（熊本市西区）の蓮田健院長（57）は、こう受け止めた。「女性の選択を尊重し、決めつけずに寄り添う。難しいことだが私たちにとって一番大事なところじゃないのか」

25面に続く

「子どもも託す」選択肢に意味

社会的に孤立する母親

フランスの「匿名出産」

現場からの報告

① 2023.12.17



匿名出産した時の状況を話すマリーさん(仮名)
10月中旬、パリ市(代表撮影)

1面から続く

マリーさんは医療社会分野で働く国家資格を持ち、障害者支援に取り組み、妊娠に気付き、産科病院でエコー検査したのは妊娠6カ月がたってからだった。



匿名出産を希望する妊婦などに渡されるパンフレット
10月中旬、パリ市

相手の男性は17歳年上の男性で、妻子がいた。マリーさん自身も男の子2人を育てる。関係は悪くなかったが、「妊娠は必ずしも望んだタイミングではなかった」。子どもを男性と育てることはできない。もし匿名出産ができなかったら、「私1人で3人を育てることになったでしょう」と話す。だがそれは現実的な選択ではなかった。

病院の助産師から、自分で子どもを育てることを望まないなら「匿名出産」ができること告げられた。マリーさんは病院でソーシャルワーカーや心理士との面談を繰り返して、「FAF」にも相手の男性と毎週通った。「さまざま選択の中で、子どもを託す選択肢があることが、私にとって意味のあることでした」

出産したその日の午後。出自情報を保管し、子どもへの情報開示の窓口となる国の機関「CNAOP(クナオプ)」の担当者が病院に駆けつけた。マリーさんは「できる限りの情報を残した」。身元を特定する健康保険番号、匿名出産に至った経緯。手紙や写真

など「思い出の品」と一緒に。そして「子どもが私に会いたいと思った時、会う手続ができるように」と、実名を記した。

クナオプは子どもが成長し開示請求した際、開示するかどうか母親に確認を取る。再会の時が訪れるのか、それがいつ、どんなタイミングになるのか。身元情報とともに、子どもと将来再会できるかもしれない。そんな希望も託した。

養子縁組が公的機関に限定される法改正があり、FAFでは現在、縁組のあつせんはしていないが、葛藤のある女性のサポートを継続する。インタビューに同席した代表のクリスティーン・ドゥレットルさんは、「関わる女性の多くは、周りに支えてくれる人がおらず、社会的孤立を経験している。それは地位や経済的状况にかかわらず、人との関係性が乏しい」と説明する。「そんな女性が、1人で子どもを育てることは難しい」

慈恵病院の蓮田健院長は終始、マリーさんの話に静かに耳を傾けた。慈恵病院

が国内で独自に取り組み内密出産を希望する女性たちもまた、社会的に孤立した人たちが多い。「家族に話せない」「誰にも知られたくない」。そんな訴えを受け止めてきた蓮田院長は「マリーさんの『病院でみんなが自分のことを大事にしてくれた』という話が印象深い。日本では母の責任や出自の問題などフランスでも起こった議論をたどっている段階だが、もっと社会にも関心を持ってもらわなければならない」と話す。

(志賀菜里耶)

◇ 国の制度として匿名で出産できるフランス。困難を抱える母子らがどんな思いを抱え、どんな支援が必要なのか。慈恵病院の視察に同行し、さまざまな専門職が支援に当たる現場をみた。

和らいだ「見捨てられた感情」

「頼んだわけでもないのに、なぜ私は実親と別れ養子になっただろう」。匿名出産で生まれたモリー・ブランチン(31)は、疑問を胸に思春期を過ごした。周りの支えもあり、今は「匿名出産で生まれたことで私が存在し、母も助けられたんじゃないか」と思えるようになった。

「同じ境遇の子どもたちに伝えたい」と生い立ちを本で公表し、講演活動にも取り組む。

パリで生まれた。思春期は恋愛や友人との関係が不安定で、常に怒りを抱えていた。薬物にも依存した。「心の奥にずっと見捨てられたという気持ちがあり、悪循環から出てこれなくなった」。自著でそう告白した。

16歳の時、「私の顔のどこが似ているのか。お母さんの写真だけでも見たい」という

実親情報の開示



匿名出産で生まれたモリー・ブランチンさん
10月、パリ市

気持ちがあくくろみ、養子縁組類を見ることができなかつた。その後、大学の職場実習で南アフリカを訪問しフランスを離れたことで、「自分が白人でも黒人でもないことに、初めて気付いた」。もう一度、養子縁組機関を訪れた。24歳だった。

幼い頃から「お母さんは小柄で色が黒くて、くるくると巻いた髪なんだろう」と想像してきた。自身が褐色の肌、カーリーヘアだからだ。ただ書類に書かれた母の容姿は「背の高い白人女性」。自分の見た目に似つかない情報に「単純なことなのに、すごくショックを受けがっかりした」。

ただ書類を見たことで、見捨てられた感情が和らいだ。実母が匿名出産を選んだ理由に「家族を迎えられ赤ちゃんが幸せになってほしいから」と書いていたからだ。母の実名も記されていたが「本当の名前ではないかもしれない」と、母を探そうと思わないという。

開示には必ず心理士が寄り添う。なぜ知りたくなったのか、何を求めているのか。「親の情報を見るのに適したタイミングかどうか。怒りや悲しみの感情に寄り添い、当事者を1人にしないことが大事だ」

パリで養子縁組に取り組んできた民間団体「FAF」のクリスティーン・ドゥレットさんは、養子縁組した子どもは「母はどういった状況で育てられなかったのか」を知りたがることを説明する。「愛されてきたとまでいかななくても『自分のために一番良い選択をした』ことを確認したがる」。容姿の情報を求めることも多く、「親の名前を知りたい、会いたい」という人は

モリーさんには弟と妹がいるが、それぞれルーツが異なる養子だ。3人それぞれに特別な「箱」があるという。生まれた時の看護師の記録など自分に関する書類が入っていて、「いつでも見ることでできた」。養親は、実親のことをいっかもっと多く知ることができると伝え続けた。

結婚し、出産も経験した。自分が母になっても、実母の選択は完全には理解はできないが、自著ではこう語る。「長い間、なんで見捨てられるんだろうかと思っていたが、今では養子縁組と愛はつながっていると感じる。家族の多様性を誇りに思い、現実を受け入れられる自分を誇りに思う」
(志賀菜里耶)

フランスの匿名出産

現場からの報告

2023.12.18

「根っこ」探すわが子見守って

パリ近郊に住むセリーヌさん(仮名)は十数年前、生後数カ月のルイさん(仮名)を養子縁組で迎えた。「赤ちゃんが来ました」と連絡を受けたんです。10月の夕暮れ時、閑静な住宅街にある自宅でアルバムをめくりながら、ルイさんを家族として迎える知らせを受けた日のことを話し始めた。

アルバムの中で、セリーヌさんの腕に抱かれた小さな息子は現在、10代後半。実親は北アフリカ出身で、匿名出産で生まれた。セリーヌさんが、ルイさんの出自について知りうることはわずかだった。

ルイさんは小さい頃から「なんで自分のことを育てられなかったんだと思う?」「お父さんお母さんにぼくは似ているのかな」と繰り返し尋ねてきた。車中から外の風景を

家族に迎えた養親



匿名出産で生まれたルイさんを養子として迎えたセリーヌさん。アルバムをめくり当時を語る(いずれも仮名) = 10月、パリ近郊

見て「あの建物の中にきょうだいがいるかもしれない」と言ったこともある。様子に、セリーヌさんは「彼はパズルのピースを埋められ

る方法をずっと探し続けた。木がどんどん育っていくのに、根っこがない状況でした」と振り返る。

ルイさんが14歳の時、養子縁組事務所へ実親の情報を見に行った。得られたのは、ほんの小さな紙切れの写し。とても少ない情報だったが、喜びいっぱい持ち帰った。

ただ、紙切れにはテープで隠された部分があった。母親の名前と思われる欄だ。「アクセスすることができない」。セリーヌさんにとって、そんな印象を受けるものだったという。

ルイさんは思春期に「怒り」が表出し、安定しない時期が続いた。矛先は教師や警察など、権威的な存在に向けられた。「いつか捨てられるんじゃないか」という思いは一般の子どもより大きい。セリーヌさんは息子の行動を「あなたはそのことを捨てないのか」と試しているように感じた。

生まれてすぐの頃は、心理士などたくさんさんの専門職に見守られていた。だが「思春期で爆発した時に、どういふうにすればいいのか」という準備は十分にできていなかった。ルイさんが苦しんでいる時に心境を十分に理解してくれる心理士になかなか出会えなかったという反省もある。

「親もしっかりと周りに支えてもらう必要がありました」。親子間で抱えられるこ

とばかりではない。セリーヌさんもさまざまな場面で専門職にアドバイスを受けた。両親以外の家族の存在もあり、今は少しずつ、ルイさん自身が将来を考え始めているという。

ルイさんはバンド活動の中で実母が与えた名前を使っている。セリーヌさんは「アイデンティティーをいろんなどころで集め、自分を形成している。自分の歴史を知らないで前に進むというのは難しいことなんです」。ピースを探し続けるわが子をずっと見守る。

話を耳を傾けた慈恵病院(熊本市西区)の蓮田真琴・新生児相談室長は「匿名で生まれた子どもたちみんなが、『自分はすごく幸せ』と感じて過ごしていくわけではないだろう」。病院で取り組む内密出産で生まれた赤ちゃんに思いをめぐらせる。「ただ、事情があって生まれた子どもたちもみんなが平等に幸せに生まれる権利がある。支えるのは養親や周りの専門職で、大人の責任だ」

(志賀菜里耶)

フランスの「匿名出産」

現場からの報告

③
2023.12.19

専門職「女性の自己決定」重視

パリ西部のル・ヴェジネ市の住宅街にあるヴェジネ病院は、匿名出産をする女性を年間5、6人受け入れている。近隣の産科病院と連携し、社会的、心理的なサポートが必要な妊婦や出産後の母子を受け入れる公立病院だ。

フランスでは匿名出産の希望があると、さまざまな専門職が妊婦と面談する。10月中旬、匿名出産制度の視察に訪れた慈恵病院（熊本市西区）の蓮田健院長らに、周産期科部門長のアンヌ・ドゥワットゥルシ医師が説明した。「助産師と、産科専属の心理士、ソーシャルワーカーの3者が会い、それぞれの視点から女性のことを知ろうとします」。妊婦がなぜ匿名を望み、どんな問題を抱えているのか。日本国内で唯一、匿名で妊婦を受け入れる慈恵病院が直面する同じ課題だ。アンヌ医師は「大切なのは専門職が1人

チームで妊婦サポート



赤ちゃんの心理的なサポートをするため、母親とともに観察するヴェジネ病院の心理士（右）
=10月、フランスのル・ヴェジネ市

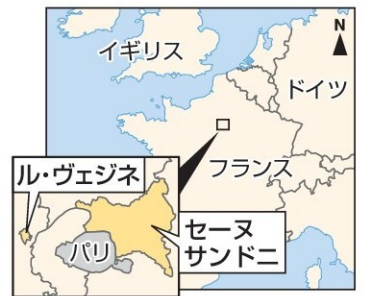
で抱えることなく、全員が女性の周りにいること」とチームでの支援体制の重要性を説明する。現場で重視するのは、「女性の自己決定」だ。妊娠期から出産後までさまざまな専門職がかかわり、女性自身が判断できるようにサポートする。

社会的孤立などの状況を把握し、関係機関との調整をはかる。退院後の経済的支援や保育サービスなどを提案。入院から元の暮らしへスムーズに移行するために不可欠な役割を果たす。

心理士は母親だけでなく、生後間もない赤ちゃんを身体的、心理的に観察。赤ちゃんに毎日語りかけ、母親の代わりに、母親が置かれた状況を言葉で説明していく。赤ちゃんへの説明やケアが不足すると、その後の発達に悪影響を及ぼしリスクが生産続くと考えられているからだ。

アンヌ医師は言う。「（困難を抱えた）人間として、その後の発達に悪影響を及ぼしリスクが生産続くと考えられているからだ。」

アンヌ医師は言う。「（困難を抱えた）人間として、その後の発達に悪影響を及ぼしリスクが生産続くと考えられているからだ。」



して（子を産んだ母として）1人の女性の中には、それぞれが認識して接することが必要」

パリの北に位置するセーヌサンドニ県。人口規模は熊本県とほぼ同じ160万人だが、170カ国の国籍の人たちが暮らす。人口比率も若年層が高い。

フランス全土には、妊娠中の女性や3歳までの児童保護を担う公的機関「妊産婦幼児

保護センター（PMI）」が置かれるが、同県内は112カ所と全国的にも多い。PMIの婦人科医エマニュエル・ピオ医師は「女性が社会の中で自分の居場所があると思えること、そして女性自身が選択できることが必要だ」と話す。

PMIには医師以外にも、心理士や幼児エデュケーター、児童保護専門医、小児看護師などの職種が在籍する。医療機関で妊娠届が記入されると、オンライン上で妊婦の情報を職員が自動で共有。リスクがある妊婦や母子には家庭訪問する。中絶を希望する女性が訪れることもあり、緊急避妊薬やピルを処方する。出産をはじめ、避妊や中絶の費用を国が全て無料で提供する。妊婦を支える機関が多数存在することに、ピオ医師は「女性が望んでいないタイミングで妊娠するということが、虐待だけではなく、傷つく子どもを増やすということ」と指摘した上で「望ましい時に子どもを育てる状況をつくらなければならない」と説明する。（志賀菜里耶）

フランスの匿名出産

現場からの報告

④

2023.12.21

子と実母 「意思の一致」で開示

フランスが国の制度として認める匿名出産。1978年、公的機関が保管する情報を開示請求できる法律ができたのを契機に、実親の情報を知らうとする動きが盛んになった。2002年、子どもの出自情報に関する法律が成立。「子どもは自分の出自情報に

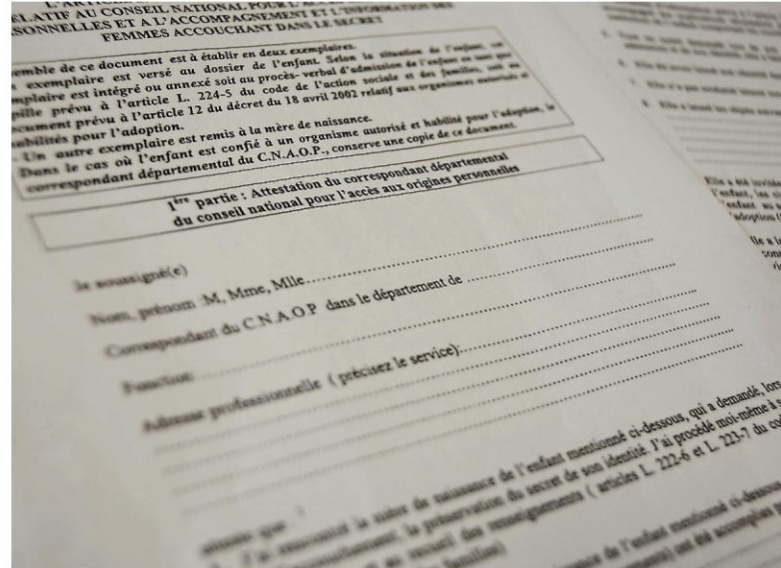


ブシコさん

アクセスできるが、実母の了解と意思が必要」という内容だ。

「この法律は女性を守ろうという意思のある法律。選択を尊重するというのが原則だ」。元最高裁判事で、法律の制定にかかわったマリール・クリスチヌ・ルー・ブシコさん

身元特定できる出自情報



クナオプの担当者が書き込んでいく、母親の情報についての書類。母の身元を特定する情報、特定しない情報の欄がそれぞれある=10月、パリ

んは説明する。法律と同時に創設されたのが、出自情報を管理する国家機関「CNAOP（クナオプ）」。

「子どもが実母を知ること」と、「実母が秘密を守る」とは、いずれも絶対的ではない制度を作り上げたフランス。クナオプの立ち上げ時、事務局長を務めたブシコさんは「どちらも相対的になったと言える」と表現する。双方のバランスを取り、両者の「意思の一致」が原則だという。

「子どもが実母を知ること」と、「実母が秘密を守る」とは、いずれも絶対的ではない制度を作り上げたフランス。クナオプの立ち上げ時、事務局長を務めたブシコさんは「どちらも相対的になったと言える」と表現する。双方のバランスを取り、両者の「意思の一致」が原則だという。

「子どもが実母を知ること」と、「実母が秘密を守る」とは、いずれも絶対的ではない制度を作り上げたフランス。クナオプの立ち上げ時、事務局長を務めたブシコさんは「どちらも相対的になったと言える」と表現する。双方のバランスを取り、両者の「意思の一致」が原則だという。

「子どもが実母を知ること」と、「実母が秘密を守る」とは、いずれも絶対的ではない制度を作り上げたフランス。クナオプの立ち上げ時、事務局長を務めたブシコさんは「どちらも相対的になったと言える」と表現する。双方のバランスを取り、両者の「意思の一致」が原則だという。

「子どもが実母を知ること」と、「実母が秘密を守る」とは、いずれも絶対的ではない制度を作り上げたフランス。クナオプの立ち上げ時、事務局長を務めたブシコさんは「どちらも相対的になったと言える」と表現する。双方のバランスを取り、両者の「意思の一致」が原則だという。

「子どもが実母を知ること」と、「実母が秘密を守る」とは、いずれも絶対的ではない制度を作り上げたフランス。クナオプの立ち上げ時、事務局長を務めたブシコさんは「どちらも相対的になったと言える」と表現する。双方のバランスを取り、両者の「意思の一致」が原則だという。

フランスの匿名出産

現場からの報告

2023.12.23

表は「女性自身が子に氏名を伝えてほしくない、会いたくない、ということであればその選択を尊重する」。さらに「法律を遵守した、公的機関が担うことが大事」と強調する。

フランスでは1904年に禁止されるまで、育てられない赤ちゃんを匿名で預かる「ベビーボックス」（赤ちゃんポスト）も存在し、匿名出産と併存した時期があった。ただベビーボックスは実母に接触できず、病院ではない自宅などで産む危険がある。子どもの「知る権利」を守り、実母が安全な出産をするために、ベビーボックスを淘汰し、匿名出産を制度として確立してきた。

子どもが出自を知る権利の保証や、出産を知られたくない女性の権利をどう守るか。日本では慈恵病院と熊本市が独自に検討の場を共同設置し、議論を始めたばかりだ。その場に国の姿はない。

(志賀菜里耶)



妊娠に悩む女性の支援団体を視察する慈恵病院の蓮田健院長（右から2番目）ら＝10月、パリ

母子にさまざまな選択肢を

慈恵病院・蓮田院長に聞く

フランスの母子支援の現場を10月、慈恵病院（熊本市西区）の蓮田健院長（57）が視察した。「匿名出産が法整備され、公的な支援体制が整っている」と話す蓮田院長に、成果や今後国内で生かすべき点を聞いた。

（聞き手・志賀茉莉耶）

視察の成果を教えてください。

「匿名出産を全土の病院が受け入れ、妊娠に悩む女性向けの相談窓口がある。官民の機関で役割が分担され、支援に当たる専門職のクオリティが高い。子どもが生まれた後、出自情報を集めて保管し、開示の窓口ともなる国の機関がある。その全てを（慈恵病院が）担っていくのは非常に重く、うらやましくもある」

「特に私たちは子どもの出自

に関する課題を抱えている。慈恵病院の相談室長のみに実名を告げ、看護師らは仮名で接する内密出産はフランスの匿名出産に近い。初事例から2年たつが、『このよりのゆりかご』（赤ちゃんポスト）は設置から16年、ゆりかごに預けられた子どもが、病院を離れた後の状況を知ることができず、その後どういう人生をたどっているのかわからない。問題を先送りにしてきた反省もある」

「出自に関し、フランスで印象に残った点は。」

「日本の議論は『子の出自』と『母の匿名性』が対立軸となる。一方フランスでは、親の身元につながる情報とつながらない情報に分けて保管し、母子それぞれ要望を調整して開示し両立を図る。子どもが知りたい

ことは（開示に同意が不要な）

つながらない情報の中にあるかもしれないし、年齢によっても変わっていく。今回、匿名出産で生まれた女性が『実母の容姿が大事』と話していたのは意外だった」

「今年7月、出自に関する検討会を熊本市と共同設置しました。」

「検討会では一定のルールは作るが、子どもが何を求めるのか見極めていくことが必要。開示時の心理的ケアも重要だ。ただ開示内容はケース・バイ・ケースになり、全てを伝えられないのは確か。どんなに力を尽くしても、当事者は不十分と受け止めるかもしれない（知ることができない）ハンディがあっても、それぞれの幸せを享受できるものにならなければならない」

「フランスは『赤ちゃんポスト』をやめています。」

「フランスでは年間400人ほどが匿名出産しているが、対象が広い。一方慈恵に来る妊婦は、自身の障害による特性や実家の親からの虐待など、状況がより深刻。子育てには意欲と能力、環境それぞれが必要だが、妊婦が抱える問題はあまりにも難しい。日本は実名を明かせば公的支援が受けられるが、体制が脆弱で（育児を諦め）女性がドロップアウトしてしまう」

「母子の健康を守る点では内密出産が理想だが、医療者に対する姿を見せたくない人もいる。いろいろなステージに合った引き出しを準備することが重要で、日本では内密出産とゆりかごは両方とも必要だ。フランスの制度も100点満点ではない。今後は消防署などで面前で赤ちゃんを預かるアメリカの仕組みなども視察したい。諸外国の試みの中で、日本でも選択肢として取り入れられるものを学んでいく」

＝終わり